

オリジナル水稻品種の開発とトップブランドへの展望

櫻 田 博

(山形県立農業試験場庄内支場)

Exploitation of Individual Rice Cultivars and Prospect of Reach of Best Brand

Hiroshi SAKURADA

(Shonai Branch., Yamagata Pref. Agric. Exp. Stn.)

1. はじめに

山形県、特に、庄内地方は水稻品種への関心が高く、明治時代には不朽の名品種「亀の尾」の育成者、阿部亀治氏を始めとして多くの民間育種家を輩出し、多くの民間育成品種が創出された。

そのような風土のなかで、山形農試では大正6年に人工交配による水稻育種を開始した。

昭和9年の冷害を契機に、全国地域別の国の冷害防止指定試験地として昭和10年に尾花沢試験地（尾花沢分場）が設置された。以後昭和56年まで耐冷、強稈、多収、良質品種育成を目標に、「尾花沢1号～7号」、「さわのはな」、「でわみのり」、「でわちから」、「はなひかり」、「やまてにしき」など多くの品種を誕生させてきた。

昭和38年、庄内分場（庄内支場）にも平坦地向け品種育成を目標に育種部門が新設され、その成果として、「あさあけ」が作出された。

昭和57年には、2場所で分担していた育種を効率的に進めるため、尾花沢試験地を廃止し庄内支場に統合し現在に至っている。

育種目標も時代、時代の米をめぐる情勢により重点が変化し、戦後の米不足時代から昭和40年代前半までは収量性、耐病性、耐冷性などが最も重視された。その後、米生産過剰時代の40年代

半ば以降は量から質への転換、50年代半ばからは品質だけでなく食味に重点が置かれるようになってきた。

消費者の良質・良食味米へのニーズが強く、販売面での産地間競争の激しさが増す時代には販売戦略上、最大の武器となる独自の新品種を開発することが緊急の課題となった。

また、新品種を生かし産米の銘柄確立のためには、作付け誘導、技術的支援に販売戦略などを加えた総合的な米づくり運動がますます重要となってきた。

ここでは、山形県におけるオリジナルな水稻品種の開発状況と銘柄確立に向けた県をあげての米づくり運動並びにその成果について報告する。

2. オリジナル品種の開発

最初に、消費者の良質・良食味米へのニーズが強くなり、米の産地間競争が高まりつつあった昭和50年代半ば以降の山形県の品種開発状況について概括してみる。

表-1にみられるように、昭和62年の「はなの舞」を皮切りに、「みちのくわせ」、「はえぬき」、「どまんなか」、「雪化粧」、平成8年の「山形54号」まで7品種（内2品種は酒米）が奨励品種に採用

表－１ 山形県育成系統の奨励品種編入経過（最近10年）

年 次	昭和62年	昭和63年	平成 3 年	平成 6 年	平成 8 年
食 用 米	は な の 舞	み ち の く わ せ	は え ぬ き ど ま ん な か		山 形 54 号
酒 米			雪 化 粧	出 羽 燦 々	

表－２ 育成品種の特性一覧

項 目	品 種	は な の 舞	山 形 54 号	ど ま ん な か	は え ぬ き	サ サ ニ シ キ
	期 型	早 生 やや長稈 偏穂重型	早生の晩 中 稈 中 間 型	中 生 中 稈 中 間 型	中生の晩 短 稈 中 間 型	中生の晩 中 稈 穂 数 型
出 穂 期 (月・日)		7・30	8・3	8・5	8・8	8・6
成 熟 期 (月・日)		9・7	9・10	9・13	9・19	9・18
稈 長 (cm)		85	84	82	73	87
穂 長 (cm)		18.5	18.7	19.2	17.6	18.3
穂 数 (本/m ²)		455	503	485	522	571
芒 の 多 少		少	中	少	中	少
ふ 先 色		短 黄 白	中 中 黄 白	短 黄 白	中 中 黄 白	短 黄 白
耐 倒 伏 性		やや強	中	やや強	強	弱
穂 発 芽 性		やや難	やや難	中	中	易
耐 冷 性		極 強	極 強	中	極 強	やや弱
い も ち 病 葉		やや強	やや強	やや弱	中	弱
抵 抗 性 穂		中	中	やや弱	やや強	やや弱
収 量 (kg/a)		57.4	56.7	61.5	58.7	50.0
玄米千粒重 (g)		21.5	22.0	22.6	22.1	21.6
玄米品質 (1-9)		4.3	3.7	4.0	3.7	6.3
食 味 (育成他)		-0.4	0.1	0.3	0.2	0.0
アミロース含有率(%)		18.8	19.2	19.1	19.4	19.4
粗蛋白質含有率 %		7.5	7.4	7.8	6.8	7.6
食 味 (穀 検)		0.0	0.3	0.5	0.6	0.3

注) 調 査 年：平成 6 年～ 8 年（数値は 3 カ年の平均値）、
 玄 米 品 質：1（上上）～ 4（中中）～ 9（下下）
 食味基準品種：育成地；庄内支場産、ササニシキ、穀検；滋賀県湖南産、日本晴

された。

(1) 良質・良食味品種

山形県での良食味品種育成の第1号は「はなの舞」である。この時代は、他県でも「きらら397」、「あきたこまち」、「つがるおとめ」が開発され、良食味品種の産地間競争の幕開けの時代であった。「はなの舞」は昭和49年の交配で、組合せは「北陸99号」×「コシヒカリ」であり、耐冷性極強の早生、やや長稈、良質・良食味品種である(表-2)³⁾。山形県最上地方を中心に普及し、自主流通米として取引され、中山間地帯の稲作経営に大きく貢献した。

また、耐冷性極強、良質・良食味品種として、千葉県、福島県、岐阜県であいついで奨励品種に編入された。

その後、岩手県の「かけはし」、「ゆめさんさ」、富山県の「おわら美人」、秋田県の「でわひかり」、新潟県の「なごりゆき」、「はしり味」など「はなの舞」を母本とした品種も多く作出されている。

昭和60年以降、庄内支場でも「はなの舞」の評価を含め米の食味に関する基礎試験を組み、各種分析を試みてみた。当地でも、アミロースや蛋白質含有率、熱糊化性などの食味関連理化学特性が食味に大きく影響し、それらを良食味品種選抜に活用できることを確認した^{1) 6)}。

そこで、山形県では平成元年から今までにない大型予算で銘柄水稻品種開発事業を開始した。先の基礎試験などを踏まえ、オートアナライザー、近赤外分光分析機など少量のサンプルを、簡易に、かつ迅速に分析できる機器を東北では、いち

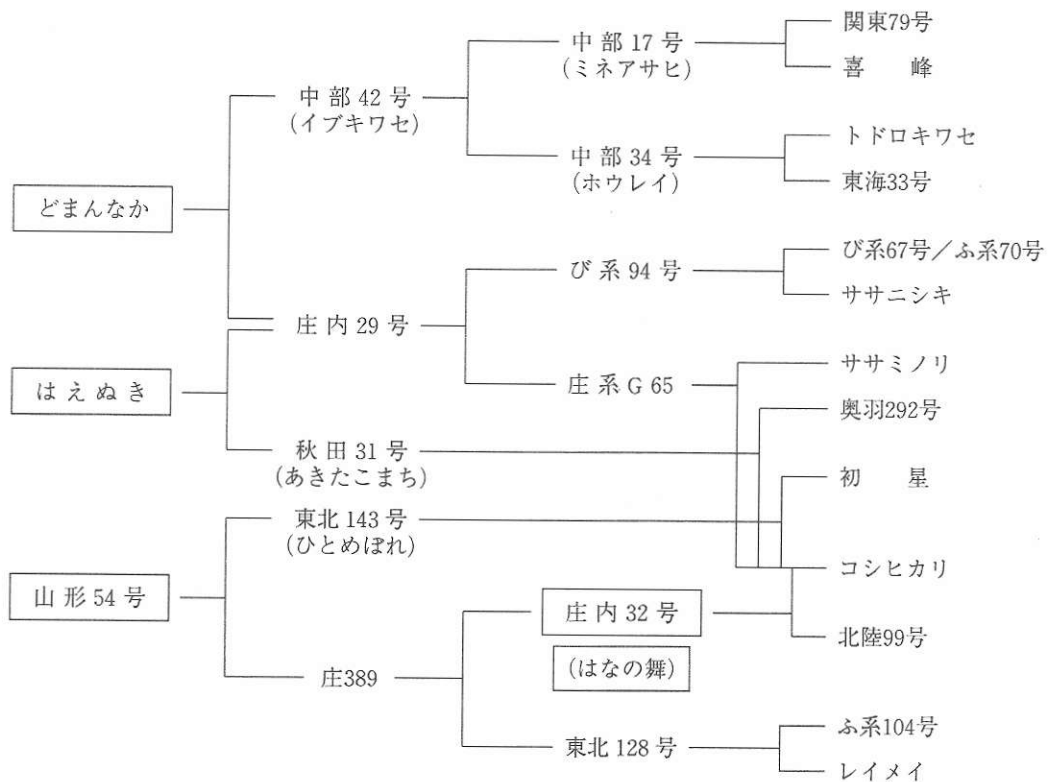


図-1 育成品種の系譜図

早く導入し、早い世代から良食味品種の選抜に活用を図ってきた。個体選抜段階でアミロース分析、単独系統選抜からは蛋白質分析を加え、生産力検定予備試験以降は官能試験、各種分析方法を取り入れて総合的に食味検定を行ってきた。

その経過の中から平成3年に「はえぬき」と「どまんなか」、平成8年に「山形54号」の良質・良食味品種の誕生に辿りついた。

図-1には、育成品種の系譜を示した。「どまんなか」は「ササニシキ」の血を引いているが、他はほとんど「コシヒカリ」後継に偏っている状況にある。

「はえぬき」(山形45号)は昭和57年の交配で、組合せは庄内29号/秋田31号、(あきたこまち)である。中生の晩で短稈、強稈で耐倒伏性は強く、耐冷性も極強である。「ササニシキ」に比べ大粒で玄米品質、食味が優れる(表-2)⁴⁾。

「どまんなか」(山形35号)は昭和56年の交配で、組合せは中部42号、イブキワセ/庄内29号

である。中生、収量並で腹白、乳白が極めて少なく良質で、食味も「ササニシキ」を上回る(表-2)⁵⁾。

平成1年～2年の奨励品種決定調査時の両品種の穀物検定協会では、総合評価で「ササニシキ」が0.3に対して「はえぬき」が0.6,「どまんなか」が0.4～0.6で味が良く、粘りがあるとの評価であった。

「はえぬき」は、奨励品種決定調査現地試験での評判が高かったこともあり、異例の早さで奨励品種となった。早期に銘柄確立を図るためには、一般作付けをできるだけ多くし、市場での評価を得る必要があると判断した。このため、平成3年に沖縄県石垣島市で一次増殖、県内で二次増殖と今までにない緊急種子対策をとり、平成4年の作付け面積は4,376haに及んだ。

「はえぬき」と「どまんなか」のネーミングに際しては、11万点以上の公募の中から選定された。発表時には異論が続出し、批判的な意見も多

地帯区分	出 穂 期 (月・日)					
	7・25	8・1	8・5	8・10	8・15	8・20
平 坦 部	はなの舞	山形54号 あきたこまち どまんなか		ササニシキ ひとめぼれ はえぬき	○	コシヒカリ
中 山 間 部		はなの舞	山形54号 あきたこまち		どまんなか	
山 間 部			みちのくわせ	○	はなの舞 山形54号 あきたこまち	

注) ○印部位の品種開発が要請されている。

図-2 山形県の地帯別品種と出穂期

かったが時間の経過とともに馴染まれ、定着してきた。

「山形 54 号」は平成元年の交配で、庄 389（はなの舞／東北 128 号）／東北 143 号、（ひとめぼれ）の組合せの第 2 世代（F₂）を蒔培養し、その後系統育種法で選抜した。熟期は「はなの舞」と「どまんなか」の中間の早生の晩である。収量性はやや劣るが、耐冷性は極強、品質は極良である。平成 6 年の高温年次でも品質劣化が少なく安定しているとの評価を山形県のみならず、宮城、秋田県など他県でも得ている。玄米特性として精米白度が高い特徴があり、早生としては食味も良い。

耐冷性、品質からみて中山間地帯の主要品種として、また、平坦地帯での作期拡大のための組合せ品種として、適応地帯の広い品種である。さらに、熟期、品質の安定性から直播栽培での活用も期待できる。

良質・良食味品種の配置に関しては、熟期的に若干残された分野（極早生、中生～晩生）があるものの、図 - 2 のように県奨励品種ではほぼ県内の全域をカバーできる状況にある。

(2) 酒米品種の育成

昭和 50 年代後半以降、一般食用米過剰基調のなか、酒米など各種用途別品種への要請も出てき

た。

酒米については、生産者からは栽培し易く、経済的メリットのある品種を、一方、酒造業界からは酒造特性の優れた酒米品種が要望され、「県産酒はオリジナル品種で」というのが酒造関係者にとっての悲願でもあった。

庄内支場でも、昭和 59 年から用途別品種の育成の一貫として酒米育種を開始した。栽培特性面からは、従来の品種は長稈で倒れやすいことなどから耐倒伏性強化など、栽培特性の改善をねらいとした。また、酒造特性面からは、酒米（もと米）として大粒で千粒重が重いこと、心白の発現が良いこと、蛋白質が少ないことなどを目標に掲げ、酒造特性については、山形県工業技術センターの協力を得ながら育種を進めてきた。

平成 7 年に、酒造好適米品種（もと米）として「出羽燦々」が奨励品種に採用された。

それより先の平成 3 年には、一般食用米として開発された「雪化粧」が多収性と酒造特性が評価され、酒造用掛米として県奨励品種に採用されていた。

「雪化粧」（山形 22 号）は昭和 58 年の交配で、組合せは「奥羽 301 号」（アキユタカ）／び系 94 号である。中生、強稈で多収、酒造用掛米適性では蒸米の吸水性と消化性が良い。

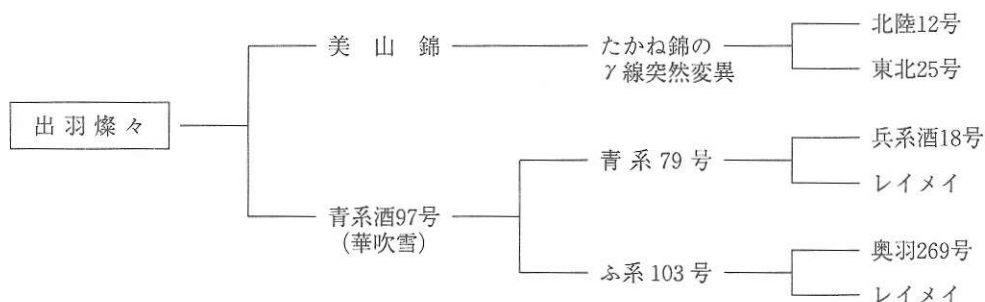


図 - 3 出羽燦々の系譜図

表－3 出羽燦々の特性一覧

品 種	出羽燦々	美山錦
項 目		
熟 期	早 生	早 生
草 型	やや長稈 穂 重 型	長 稈 穂 重 型
出穂期 (月・日)	8・5	8・4
成熟期 (月・日)	9・18	9・18
稈 長 (cm)	90	98
穂 長 (cm)	18.9	20.3
穂 数 (本/m ²)	389	380
芒 の 多 少	無	無
長 短	—	—
ふ 先 色	黄 白	黄 白
耐 倒 伏 性	中	やや弱
穂 発 芽 性	やや難	中
耐 冷 性	やや強	中
いもち病 葉	やや弱	やや弱
抵 抗 性 穂	やや弱	中
収 量 (kg/a)	52.3	44.5
玄米千粒重 (g)	25.9	25.6
玄米品質 (1-9)	4.3	5.3

「出羽燦々」(山形酒49号)は昭和60年の交配で、組合せは図-3の系譜図にあるように美山錦／青系酒97号、(華吹雪)である。中生で耐倒伏性が「美山錦」より強く、収量が安定しており、千粒重が重く大粒で品質、心白の発現も良い(表-3)。山形県工業技術センターによる酒造特性、試験醸造の結果では、「美山錦」に優る酒造特性を持ち、試験酒は「やわらかく、端麗で、きれいな酒質」との評価であった。酒米生産の安定化のみならず山形県産清酒の評価にも大きく寄与

しつつある²⁾。

品種名については、「山形県産のイメージがある」「若い消費者にもアピールする」「軽快な響き」などのコンセプトで「出羽燦々」と命名された。

なお、酒造業界では、県産酒の産地イメージ向上とブランドの確立をめざして、純米吟醸酒「^{で は さんさ}DEWA33」を開発した。酒造好適米品種「出羽燦々」100%使用、精米歩合55%以下、山形オリジナル麹菌「オリーゼ山形」、山形酵母を使用し、純米吟醸酒であることを基準に各蔵元が醸造した純米吟醸酒に「DEWA33」のラベル(純正山形酒審査会認定証)を表示し、統一ブランドとして平成8年より販売を開始した。蔵元により差はみられるものの酒質、値ごろ感などからみて比較的好評のようである。

3. トップブランドへの^{みち}途

山形県の米づくり運動は時代の要請、背景のもとに進められてきた。

昭和40年代初め、「でわみのり」などの多収品種を後ろ楯に、全県をあげて「山形県60万トン米づくり運動」(昭和42年～43年)を展開した。山形県の単収が飛躍的に伸びる原動力となり、昭和42年～45年の連続単収日本一を記録した。

その後、昭和50年代の「ササニシキ」全盛時代は、産米には自負・自信をもち、経済連などの生産者団体が中心に、継続的に独自の運動を展開してきた。

ところが、平成2年産米の自主流通米価格形成機構での入札で山形県の主力品種「ササニシキ」は基準価格を下回るとともに、残量も発生した。他県の上場品種との評価の差が生産・流通関係者に強い衝撃を与えた。

また、首都圏の流通関係者からは、山形の「サ

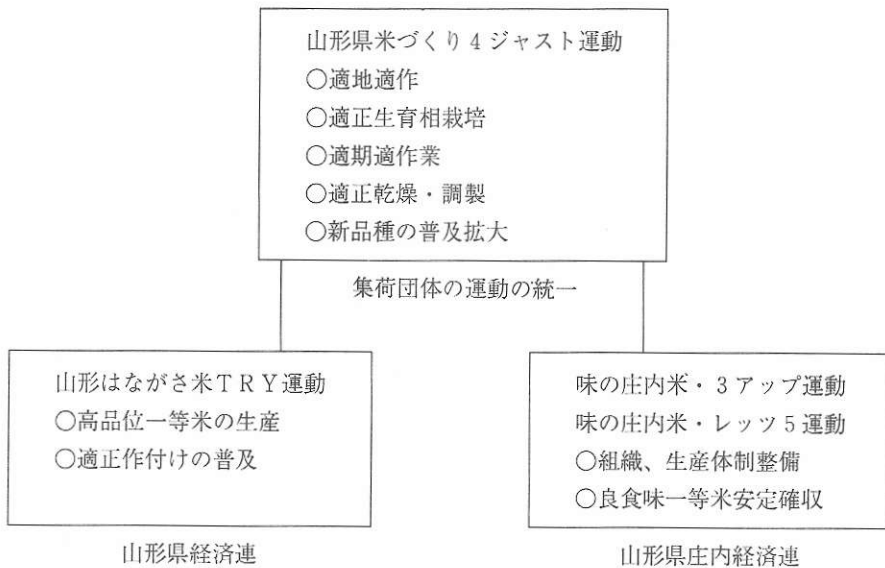


図-4 4ジャスト運動のねらい

サニシキ」は品質変動が大きく、不適地への作付けや、収量を第一にした栽培が行われているのではないかという指摘もされた。

今までと違った強力な米づくり運動を展開しないと山形の米産地としての地位を維持することが困難であるとの危機感が強まった。これらの状況を踏まえて、平成3年に県、農業団体、生産者が一体となった「山形県米づくり4ジャスト運動」がスタートした⁷⁾。

この運動は、これまで個々に行われてきた集荷団体ごとの生産対策を一体化した品質・食味向上運動であり、図-4に示したように、①適地適作、②適正生育相、③適期適作業、④適正乾燥調製の4つの重点事項を掲げた。さらに、新品種（「はえぬき」、「どまんなか」）のデビューもあり、新品種の普及拡大をも重点事項に付け加えた。

運動の成果を上げるための推進体制として、県推進協議会と7つの地域協議会を設置した。その組織構成は図-5、図-6のとおりであり、その中に生産者代表として指導農業士会を組み入れたこ

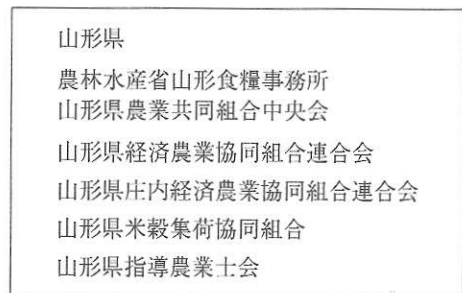


図-5 県推進協議会の組織構成

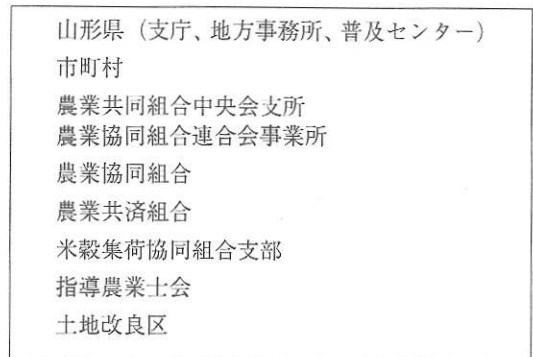


図-6 地域協議会の組織構成

と、地域協議会の推進主体を農業改良普及センターとしたことなどに大きな特徴がある。

新品種（「はえぬき」、「どまんなか」）の普及拡大にあたっては、①適地への作付け、②技術の高い農家への栽培限定（栽培農家の登録）、③栽培技術の指導徹底を図り、産米の高い市場評価を得ることが緊急の課題であった（図-7）。

そこで、技術的支援として、平成3年から農業試験場本支分場が一体となったプロジェクトチームを編成し、新品種（「はえぬき」、「どまんなか」）の基本栽培適地マップ及び基本栽培マニュアルを作成した。適地マップは、適地への作付け誘導を図るための気象、土壌要因から品質、食味が十分発揮できる栽培適地図である。栽培マニュアルは品質、食味、収量等の年次、地域間格差を縮小し、高品質・良食味で安定した米をつくるための栽培

技術の組立である。その一部を図-8、表-4に示した。

m²粗数が多くなると整粒歩合が低くなり、品質を低下させるだけでなく、食味に影響を与える精米の蛋白質含有率が高まる。栽培の基本指標として、精米の蛋白質含有率が低く、整粒歩合80%の良質米が安定して確保できる収量構成要素のm²粗数は「はえぬき」で3万～3万2千粒、「どまんなか」で3万2千～3万4千粒程度である。

平成6年から8年には「4 ジャスト運動」に引き続き、米主産県として地位向上をめざし「米どころ日本一運動」を展開した。運動の推進目標として、①作柄・品質・食味の高位安定、②合理的な品種構成と多様な米づくり、③生産性の高い米づくり、④土づくりの実践を掲げた。

さらに、平成9年からは、市場ニーズの高い高

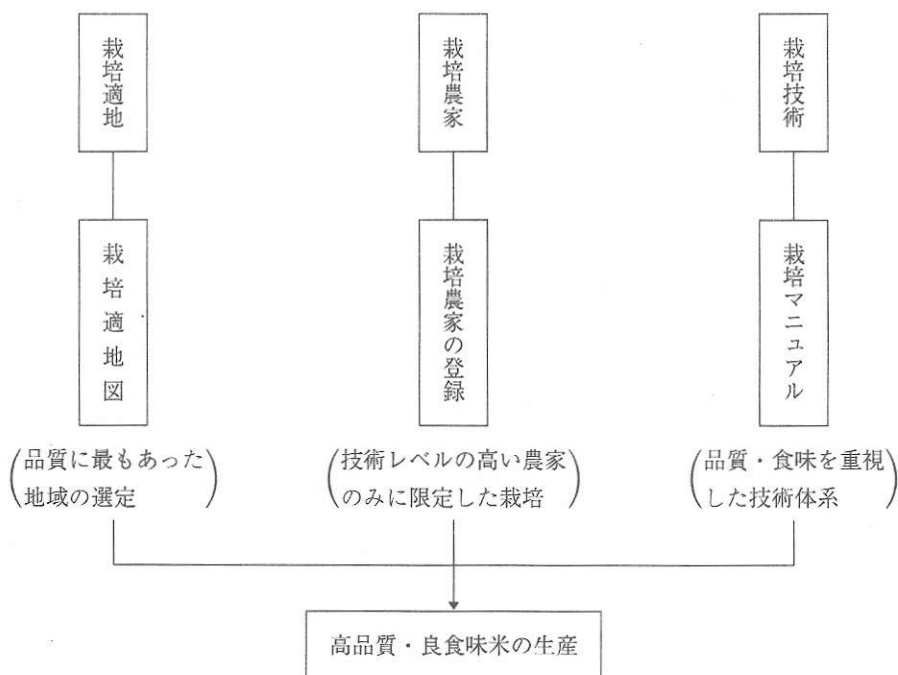
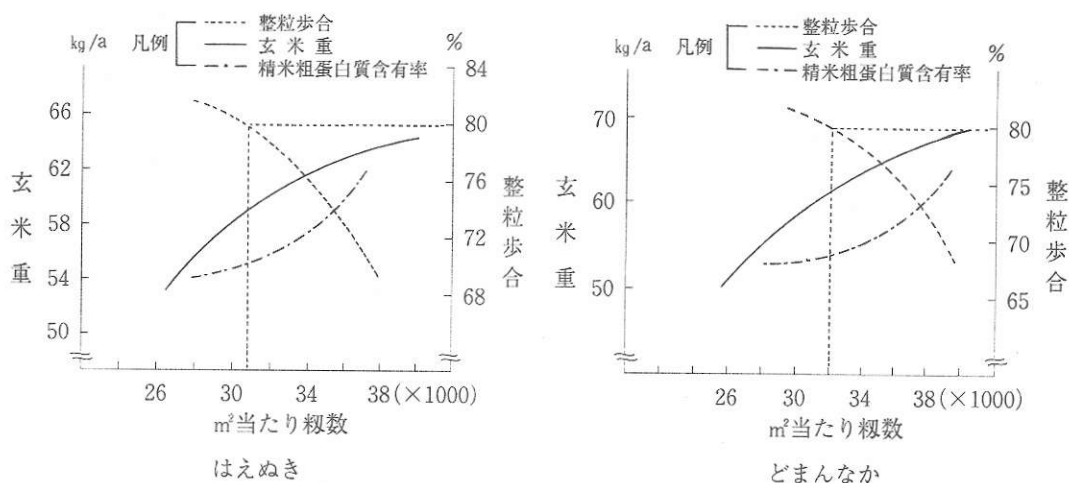


図-7 新品種（「はえぬき」、「どまんなか」）の生産対策



図－8 m^2 当たり粒数と玄米重、整粒歩合、精米粗蛋白質含有率

表－4 栽培の基本指標

項 目 品 種	品質 整粒歩合 %	収量 水準 kg/a	地域	構 成 ・ 決 定 要 素				成 熟 期		
				粒 数		玄 米 千粒重 g	精玄米 粒 数 歩 合 %	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/ m^2
				一穂当 粒	m^2 当 千粒					
はえぬき	80	58	内陸	67	30～32	22.3	84	74	17.5	460
			庄内	60	30～32	22.3	84	72	17.0	510
どまんなか	80	60	内陸	72	32～34	22.2	82	80	18.8	460
			庄内	64	32～34	22.2	82	77	18.5	510

品質・食味重視の産地化を図ることをねらいに「ベストライス生産対策事業」がスタートしている。推進目標として、①奨励品種の適正な作付け誘導、②酒米、有機栽培米など多様な米づくりの推進、③高品位米生産集団の育成、④食味向上対策として、特Aチャレンジほ場の設定、⑤新品種

「山形54号」の実証を上げている。

以上、生産対策を中心に米づくり運動の概要について述べてきたが、生産振興や流通、販売、宣伝対策などの販売戦略については、行政、団体が一体となった取り組みも継続的に、強力的に展開していることはもちろんである。

4. 品種開発と米づくり運動の成果

新品種の開発とそれをトップブランドに育てる米づくり運動が車の両輪として機能することで、米主産地としての地位の確保と維持が可能となる。

(1) 作付面積の変化

表-5には品種の作付け面積の推移を示した⁸⁾。「はえぬき」は、一般作付け初年目の平成4年に4,376haで、年々増加している。平成7年には、昭和53年から17年間作付け面積の首位を維持してきた「ササニシキ」を追い越し、30,885haが作付けされ、品種構成割合は38%に達した。

「どまんなか」は平成5年に急増し、平成7年には15,457ha（同構成割合18.9%）まで増加したが、平成8年には減少した。減少の要因は、弱点のいもち病が表面化したことや産米の評価が下がって

きたことなどによるものと推測される。

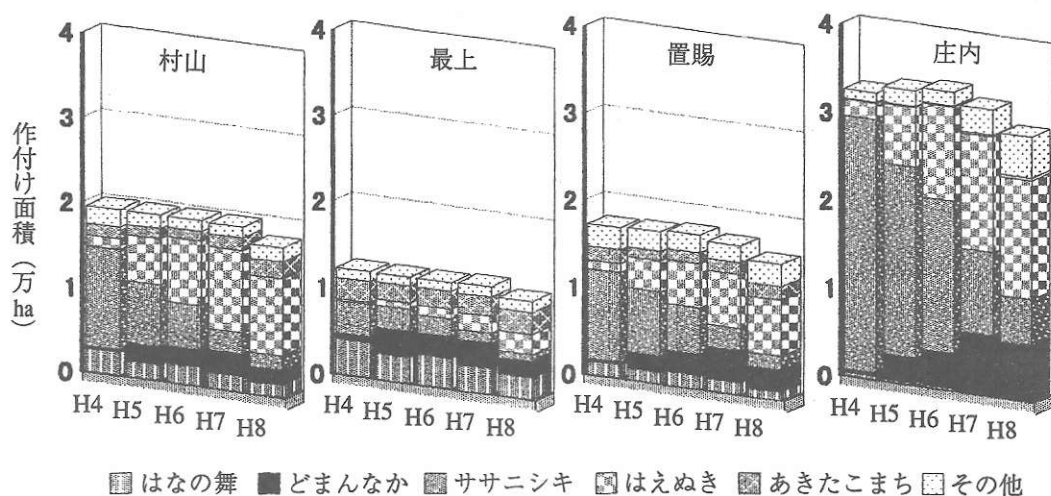
一方、「ササニシキ」は、近年急激に作付け面積が減少している。図-9に県内の4地域（村山、最上、置賜、庄内）における品種作付けの推移を示した。「はえぬき」の増加と「ササニシキ」の急減は、村山、置賜、庄内地域で同様の傾向を示しているが、特に、庄内地域の変化が大きい。「どまんなか」は、4地域とも平成7年まで増加していたが、8年から減少に転じてきた。「はなの舞」は、最上地域を中心に村山、置賜地域で作付けされているが、減少傾向にあり、「あきたこまち」との競合関係にある。

「出羽燦々」は、表-5にあるように面積は少ないが、平成7年の52haから平成8年には、183haと3倍に増加し「美山錦」に肩を並べた。

表－5 作付面積の推移（過去5年間）

年 次	平成8年	平成7年	平成6年	平成5年	平成4年
は の の 舞	5,548 7.3	6,906 8.3	8,001 9.3	6,750 7.9	8,978 10.7
ど ま ん な か	12,103 15.8	15,457 18.5	10,449 12.1	9,516 11.2	1,341 1.6
サ サ ニ シ キ	9,472 12.4	15,875 19.0	30,289 35.1	39,090 45.8	54,709 65.3
は え ぬ き	31,347 41.0	30,885 37.0	24,317 28.2	16,515 19.4	4,376 5.2
美 山 錦	170	163	143	167	195
出 羽 燦 々	183	52	—	—	—
雪 化 粧	471	639	861	715	363
計	76,404	83,382	86,283	85,314	83,894

注) 上段：作付け面積（ha）、下段：構成割合（%）
山形県食糧事務所調べ



図一 9 地域別品種構成の推移

表一 6 米の出荷数量

順位		品 種 名	出 回 り 数 量				対 7 年 比 %
平成 8 年	平成 7 年		平 成 8 年産	シェア %	平 成 7 年産	シェア %	
1	1	コ シ ヒ カ リ	1,502	25.6	1,502	23.6	100.0
2	3	あきたこまち	524	8.9	475	7.5	110.2
3	2	ひ と め ぼ れ	492	8.4	516	8.1	95.3
4	4	き ら ら 3 9 7	382	6.5	333	5.2	114.9
5	6	サ サ ニ シ キ	263	4.5	268	4.2	98.2
6	8	ヒ ノ ヒ カ リ	258	4.4	240	3.8	107.3
7	7	日 本 晴	189	3.2	263	4.1	72.0
8	9	む つ ほ ま れ	186	3.2	198	3.1	93.7
9	10	は え ぬ き	161	2.7	142	2.2	113.4
10	5	ゆ き ひ か り	160	2.7	269	4.2	59.7
14	16	ど ま ん な か	64	1.1	68	1.1	94.1

注) 食糧庁調べ (単位: 千玄米トン、%)

(2) 生産量

品種別の生産量については明確に把握できないので、便宜的に平成7年と8年の全国の米の出荷量を表-6に示した。

平成8年の「はえぬき」は、全国9位の16万1千トン（シェア2.7%）で、「どまんなか」は14位の6万4千トン（同1.1%）の出回り数量であり、県単育成品種としては、青森県の「むつほまれ」とともに健闘している。

(3) 品質

図-10には、品種別の一等米比率の推移を示した⁸⁾。「はえぬき」は、作付け面積が3万haを越えた平成7年、8年とも95%と非常に高い一等米比率を示している。「どまんなか」も比較的安定した品質で推移しているが、「ササニシキ」の品質変動が大きい。

平成6年は高温年次で、県の米単収は史上最高の615kg/10aを記録したが、反面、「ササニシキ」の品質は一等米比率が10%以下という、かつてないほど落ち込んだ。昭和37年から30年近く、県産米の評価に大きく寄与した「ササニシキ」は、

「はえぬき」「どまんなか」に品質面でも主力品種の座を譲ることになった。

(4) 食味

新品種の県内外での食味評価は、比較的良かったので、県産米の全国での位置づけを見るため、表-7に第三者機関である穀物検定協会の食味ランキング表を整理してみた。平成8年の「はえぬき」は、内陸、庄内産とも特Aと評価され、全国15産地の2産地として、県育成品種としては、高い評価を得ている。

内陸産の「はえぬき」は、3年連続の特Aで、庄内産も1年ぶりに特Aに返り咲いた。「どまんなか」と「はなの舞」は、「ササニシキ」並のAで推移しており、品種特性に対応した栽培技術の徹底が、好結果をもたらしたものと思われる。

(5) 価格

米価は、入札制度の発足後、新潟「コシヒカリ」が堅調な値動きをたどってきたものの、全般に下げ基調で推移している。

表-8には、自主流通米価格形成機構での入札価格の一部を示した。本県産の「ササニシキ」の

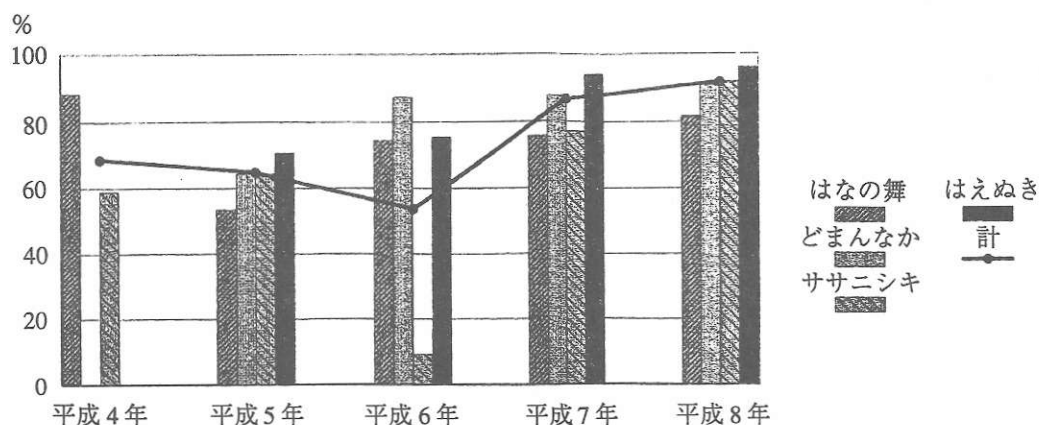


図-10 品質（一等米比率%）の推移

表－7 穀物検定協会の食味ランキング

年 次	平成 8 年	平成 7 年	平成 6 年	平成 5 年	平成 4 年
地 域	内陸 庄内	内陸 庄内	内陸 庄内	内陸 庄内	内陸 庄内
は な の 舞	A ー	A ー	A ー	A' ー	A' ー
キヨニシキ	A' ー	A ー	A' ー	ー ー	A' ー
どまんなか	A A	A A	特A ー	A ー	A ー
ササニシキ	A A	A A'	A A	A' A'	A A'
は え ぬ き	特A 特A	特A A	特A 特A	A A	A A

表－8 銘柄米の販売価格の推移

産地	品 種 名	平成 8 年	平成 7 年	平成 6 年	平成 5 年	平成 4 年
内陸	は え ぬ き	19,515	19,403	21,192	22,050	ー
庄内	は え ぬ き	19,442	19,448	21,335	22,050	ー
内陸	ど ま ん な か	19,000	19,400	21,225	22,050	ー
庄内	ど ま ん な か	19,163	19,471	21,221	22,050	ー
内陸	サ サ ニ シ キ	19,865	19,282	21,253	21,922	21,708
庄内	サ サ ニ シ キ	19,536	19,518	21,428	22,268	22,071
内陸	は な の 舞	18,794	18,859	20,707	21,319	21,066
秋田	あ き た こ ま ち	20,166	20,429	22,009	22,828	22,624
宮城	サ サ ニ シ キ	20,142	20,350	22,276	23,079	22,882
宮城	ひ と め ぼ れ	19,789	20,167	22,474	22,781	22,064

注) 東京第 1 回 (または 2 回) の入札価格 (円/60kg)

販売価格は、およそ昭和 55 年の水準にまで低下している。「はえぬき」と「どまんなか」については、「ササニシキ」並の値動きを示しているが、現状ではこれ以上の価格上昇は厳しい。

「はなの舞」については、平成元年の入札開始前年度頃の庄内産「ササニシキ」との格差に比較し、近年徐々にその差を縮めてきており、消費地からの一定の評価が定着してきている。

さらに、今年に入り、今まで特異的な存在であった新潟産「コシヒカリ」も基準価格の最低に張り付くなど価格が低迷しつつあり、生産現場では価格に対して厳しさが一段と増している。

5. おわりに

新品種「はえぬき」と「どまんなか」の登場と全県をあげての米づくり運動は、本県の稲作を活

性化させ、また、県産米の評価向上などの成果を上げつつある。多収志向から品質・食味を重視した市場に高く評価される米づくりへ、生産者をはじめ関係者の意識改革が進み、生産体制の整備は図られてきている。

しかし、残された課題も多く、品種開発では、気象変動の大きい山間から中山間地帯向け品種の耐冷性の強化、「はえぬき」、「どまんなか」などの良質・良食味品種のいもち耐病性強化、低コスト生産を念頭においた直播適性品種の育成など次期主力品種の開発が早急に求められている。

生産現場では、米過剰の折り、銘柄の評価は、産地側が期待するほど急速に高まる状況ではなく、食味評価を含めた品質向上と均質な産米の安定供給など、今以上の地道な努力と運動の積み重ねが必要である。

今後、次代を担う品種開発や新技術の開発はもちろん重要であるが、生産者の意識啓発を喚起しながら、伝統を生かし、生産と流通が一体となった取組みをさらに強化することによって山形県稲作の展望は開けるものと思われる。

引用文献

- 1) 櫻田 博, 谷藤雄二, 佐藤晨一, 菊池栄一, 中場 勝. 1988. 米の食味と理化学特性に関する育種的研究 第1報 食味特性の評価と品種間差異. 日作東北支部報. 31:1-4
- 2) 櫻田 博, 佐藤晨一, 菊池栄一, 中場 勝, 佐野智義, 谷藤雄二, 中場理恵子, 黒木斌雄, 横尾信彦, 結城和博, 後藤清三, 山川 淳. 1996. 酒米新品種「山形酒49号」の育成. 山形県立農業試験場研究報告. 30:1-15
- 3) 佐藤晨一, 上林儀徳, 後藤清三, 菊池栄一, 大淵光一, 櫻田 博, 中場 勝, 大場伸一, 谷藤雄二, 渡辺昌幸. 1987. 水稻新品種「庄内32号」の育成. 山形県立農業試験場研究報告. 22:1-16
- 4) 佐藤晨一, 菊池栄一, 櫻田 博, 中場 勝, 後藤清三, 谷藤雄二, 上林儀徳, 黒木斌雄, 大場伸一, 佐野智義, 中場理恵子, 大淵光一. 1992. 水稻新品種「山形45号」の育成. 山形県立農業試験場研究報告. 26:1-17
- 5) 佐野智義, 佐藤晨一, 菊池栄一, 後藤清三, 櫻田 博, 中場 勝, 上林儀徳, 谷藤雄二, 大場伸一, 大淵光一, 黒木斌雄, 中場理恵子. 1992. 水稻新品種「山形35号」の育成. 山形県立農業試験場研究報告. 26:19-35
- 6) 谷藤雄二, 櫻田 博, 佐藤晨一, 菊池栄一, 中場 勝. 1988. 米の食味と理化学特性に関する育種的研究 第2報 精米の理化学特性による食味選抜. 日作東北支部報. 31:5-6
- 7) 山形県水稻新品種銘柄確立対策協議会, 山形県米づくり4ジャスト運動推進協議会. 1994. はえぬき・どまんなかのデビューと米づくり4ジャスト運動の展開
- 8) 山形県農林水産部, 山形県産米改良協会連合会. 1997. 米に関する資料